

歴史を開いた城の巻

京都市内の見学場所といえば、やはり金閣・銀閣・清水等々、寺社仏閣が多く候補に挙がります。では、寺社以外の代表的見学地は？
という、その筆頭に挙げられるのは「二条城」かもしれません。



天下分け目の関ヶ原合戦から2年余り、江戸幕府の初代将軍となった徳川家康は、すでに行政の中心を江戸に移してはいましたが、都である京都には、天皇の住む京都御所を守るためと、上洛した時の宿泊所とするためにこの二条城を築城しました。ところで、城というと、何層もの階をもつ天守閣や高い石垣、敵の侵入速度を抑えるために設けた坂道、追い込んで一網打尽にするための枡形、弓矢や火縄銃を放つために塀に開けられた丸や四角の狭間と呼ばれる穴など、戦闘・防御を考慮した堅固な建造物を想像してしまいます。しかし、二条城ではこのような設備はとりあえずあるものの、それは必要最低限で、一般的な「城」のイメージからすると、ちょっと印象が違ようです。

二条城の築城は江戸時代に入っすぐ、当初は伏見城から移された五重六階の天守閣もありましたが、1750年に落雷によって焼失、その後は再建されることなく石垣だけが残って現在に至っています。家康は江戸城を築き、城としての機能は江戸に移ったことや、すでに戦乱の世は事実上終焉を告げていたことにより、都である京都には戦闘・防御を目的とした城よりも、京都御所の守護と将軍上洛時の宿泊所としての機能が求められ、ここに従来の「城」とは一線を画する、いわゆる「屋敷構えの城」というコンセプトの城が誕生したわけです。天守はなくなりましたが、本丸御殿と二の丸御殿の二つを有する規模は、二の丸御殿だけでも部屋数33、畳数800余りで、玄関にあたる車寄せには松や牡丹、伝説の鳥の彫刻が施されています。また、二条城大改修の際は西洋の建築デザイン手法を導入したようで、上洛時の宿泊所という使い方を主眼とするならば、いわば「グランドホテル二条」というようなイメージの建造物になっていたようです。そして、二の丸御殿の廊下は、歩くとうぐいすの鳴くような音がする「鶯張り」になっていますが、これは外敵が忍び込んだ際の警報装置であるとともに、来客を知らせる機能を兼ねていたようです。このほか、二の丸御殿の正門にある絢爛豪華な極彩色の彫刻が施された重要文化財の「唐門」や、書院造り庭園として特別名勝となっている小堀遠州作の「二の丸庭園」、芝生を敷き詰めて曲線的な園路をつけた優美な造りの「本丸庭園」、京の町並を見渡すことができる展望場所となった「天守閣跡」など、その多くが桃山文化の色合いを反映しつつ、当時の面影を今に残しています。



ところで、ここ二条城で何よりも注目すべきこと、それはなんといっても、「大政奉還」ではないでしょうか。時は1867年、江戸幕府の第15代将軍である徳川慶喜がこの二条城二の丸御殿内で「大政奉還」の意思を表明したことは歴史上あまりにも有名な出来事です。ただ、ここで慶喜は朝廷に政権を返上はしましたが、新政府での政権掌握を画策していました。しかし、よもやまさかの「王政復古の大号令」発布、倒幕派のクーデターともいべき動きで慶喜の動きは封じられ、新政府樹立とともに、慶喜の官位辞任・領地返上が決定されます。この時が江戸幕府の事実上の終焉となりました。その後旧幕府軍は抵抗しますが、「鳥羽・伏見の戦い」で新政府軍に惨敗、その後会津、五稜郭と連続した戦いが「戊辰戦争」として続きましたが、最終的に新政府軍が勝利して明治時代が幕を開けます。

徳川慶喜は二条城で大政奉還を行いました。これがその後の新時代を迎える原点となったことは間違いありません。歴史のターニングポイントとなり、幕末の激動を生んだ場所である二条城を見学することにより、我々が今生きている社会、そして、これから発展していく社会の原点としてのヒントを得ることができるかもしれません。